

自選200句で読む
黒田杏子の

Momoko Kuroda

俳句世界

第一句集から最新句集まで
すべての句集でたどる黒田杏子の軌跡



平成11年(1999)、61歳。
60歳からスタートした
「四國八十八ヶ所遍路吟行」第6回目、第45番札
所海岸山岩屋寺(愛媛県)
にて。遍路という旅がよ
うやく身と心になじんで
来た頃。撮影=山田哲也

くろだももこ／「藍生」主宰。昭和13年(1938)東京生まれ。東京
女子大学入学の年5月より「白塔会」にて山口青邨に師事、「夏草」
入会。青邨没後、平成2年「藍生」創刊、主宰。現代俳句女流賞・
俳人協会新人賞・俳人協会賞・桂信子賞・蛇笏賞受賞。句集『木
の椅子』『水の扉』『一木一草』『花下草上』『黒田杏子 句集成』
『日光月光』『銀河山河』、著書『俳句と出会う』『俳句列島日本す
みずみ吟遊』『布の歳時記』『手紙歳時記』ほか。



山口青邨先生との邂逅 その恵み

黒田杏子

毎朝目ざめると同時に枕元の句帳に何句か書き込む。二人暮らしの朝食を愉しみ、しばし談論風発。新聞教紙に眼を通し、執筆または選句。満齢八十の女書生の暮らしはつつがなく、おだやかに充実している。

寒牡丹大往生のあしたかな（青邨師に）

長命無欲無名往生白銀河（両親に）

十八歳。東京女子大に入学の年、その五月から青邨先生に師事。私の俳句人生の原点。この国の第一級の俳句作家にして文章家。比類のない知性と品格を備えた文人科学者。四十六歳下の女弟子の人格を尊重され太陽の如き慈愛を注がれた。何よりもその作品は年月を経ていよいよ新鮮である。

私は卒業と同時に句作中断。いくつかの表現分野を彷徨。そのち再入門を許可された。二度と句作から離れないために、単独行「日本列島櫻花巡礼」を発心。三十歳の春から二十七年間をかけて五十代の終わりに満行を見た。勤め先の仲間、句友にも一

切告げず。母と家人のみに見守られ、歩き続け、詠み続けたこのロングランの「行」こそが俳人として生き続ける私の屋台骨である。山口青邨の弟子として恥じない作者になりたい。俳句を唯一の生涯の表現手段と思いつめた以上、本格俳人をめざそうと希求。

ところで、山口青邨師は誰よりもこの国の若き俳人の育成に貢献された方である。戦前からの歴史ある「東大ホトトギス会」に加え、東大教授ご退官ののち、昭和三十一年から「東京女子大白塔会」の指導者として、九十六歳の大往生を遂げられるその前年まで、杖も曳かれずご出席。ご自身も毎回七句出句、ご指導を続けられた。私が「夏草賞」を女性として初めて受賞した折、「私は東大で古館曹人君、東京女子大で杏子さん、貴女を育てたことを自慢に思っています」と雑草園のお座敷でおっしゃられた。そしてさっと立たれ、奥の間から戻られると「この句を半折にしたためて、あとで差し上げましょう」と一枚の色紙を示された。あの躍るように自在で独特の墨の筆跡。

こほろぎのこの一徹の貌を見よ 青邨

昭和二十三年に詠まれた作品である。

ところで、先生は有季定型の俳人。しかし、〈季語の無い句はダメ。認めませんよ〉とか、〈定型を守らない句は俳句ではない〉などケチで狭量、下品なことをおっしゃるようならちっぽけな作家ではあらなかった。

「金子兜太君。あの人はあの人の道を行けばよい。彼にはそれが可能だと思えます」。私に向かって、先生はキッパリとおっしゃった。平成三十年二月二十日、兜太先生長

逝。私たちは有志で筑紫磐井さんを編集長に、橋本榮治・横澤放川・坂本宮尾・井口時男の皆さんと藤原書店を版元として、雑誌「兜太 T O T A」を春と秋の年二回刊で創刊。二号が出て、三号の準備に入ったところである。請われて、メンバーの中で最年長の故を以て、私は編集主幹という肩書を頂いている。折々に私は青郵先生が「兜太君、あの人はあの人の道を行けばよい。彼にはそれが可能だ」とおっしゃられた日の先生のまなざしと知的な風貌を眼の奥に呼び出し、励まされるのである。ちなみに兜太さんは人も知る現代俳句協会のドンでいらしたけれど、この雑誌の編集委員はすべて俳人協会会員（井口さんは無所属。文芸評論家として知られる俳人）。

結論に入る。俳人にとって、師系は重要である。すぐれた師に学ぶことの出来た恩恵は年ごとに豊かさを増してくる。その昔、私は第一句集『木の椅子』で俳人協会新人賞に加えて、現代俳句女流賞という大きな賞も同時に頂いている。この賞の選考委員は飯田龍太・森澄雄・細見綾子・野澤節子・鈴木真砂女の五名。高名なこの方々のたたにも、それまで私はお目にかかったことが無かった。後日その推薦理由と選評を拝読した折、私は「青郵門下であること、学生時代から青郵先生の指導を受けていた者であること」がこの方々の判断の基にあったのだ、と理解した。山口青郵という作家への信頼が黒田杏子というかけ出しのチンピラ俳人への期待につながったことを知り、あらためて感動と感謝の念につつまれた。この受賞以前から私は、見事に長命を保たれた恩師に躰き、八十代以降の青郵師の赴かれるほとんどの場所に同行を許された。職場の理解に恵まれ、繰り返された生地盛岡行はもとより、「夏草」会員の多い甲州・信州、

さらにゆったりと愉しまれた淡海周遊の旅にも、古館曹人・斎藤夏風さんたち兄弟子と共に参加を許された。先生といそ子夫人におよろこびと安心を頂けた各地への急がない旅の日々のお供をさせて頂いてきた。いちばんの果報者は私であった。俳人として生きる人生のあり方を学んだ。先生ほど平等な方を知らない。私と対等に議論したり質問もされた。全面的に先生に信頼されているという歎びが私を常に前に進めてくれる原動力となった。私がまのあたりに出来た先生は、45その他同時代の俳人のどなたよりも豊かで幸福な大晩年を送られた。才能と努力と知性の雑草園主人。心身ともに健康に恵まれた品格ある明治二十五年生まれの気骨の俳人。あらためて今思う。山口青郵という無二の師と黒田杏子との邂逅が、「夏草」終刊にともなって文字通り全く新たにスタートしたわが「藍生」のすべての仲間の句業と文運を支え続けてくださっているという事実を。師恩はとこしえに無限に続くのだ。感謝を捧げたい。

〈附記〉

思いもかけぬ第一句集『木の椅子』での受賞。修行に停滞は許されなれないと思い、以後積極的に行動してきました。国宝「一遍聖繪」を辿る旅。「おくのほそ道」三百年企画、平凡社「太陽」での全行程を辿る旅。「西國・坂東・秩父の日本百観音巡礼吟行」。「藍生」創刊と同時に始めた「廣重江戸名所百景」の月例吟行など。個人及び結社の仲間とすべてのロングランのプログラムを満行出来たことは、俳人としての私の何よりの幸運であり、生きてゆく自信にもつながりました。

『木の椅子』

十二支みな闇に逃げこむ走馬燈
 稲妻の緑袖を浴ぶ野の果に
 昼休みみじかくて草青みたり
 はにわ乾くすみれに触れてきし風に
 四万六千日飢餓絵図の婆靴磨く
 ブレザーの金の釦の月昇る
 夕桜藍甕くらく藍激す
 休診の父と来てをり崩れ築
 丹頂が来る日輪の彼方より
 鉋路鶴居村 十句(うち二句)
 かよひ路のわが橋いくつ都鳥
 緑蔭は深し馬車待つごとく佇つ

小春日やりんりと鳴る耳環欲し

白葱のひかりの棒をいま刻む

柚子湯してあしたのあしたおもふかな

西彼杵半島

漁婦マリア鹿尾菜したたるまゝに負ふ

青邸先生ご夫妻に躑躅琵琶湖をめぐる 十七句(うち二句)

湖わたる風はなにいろ更衣

桐高く咲くや会津に山の雨

一本の背骨はありぬ昼寝覚

暗室の男のために秋刀魚焼く

昂然としぐるる街のかほひとつ

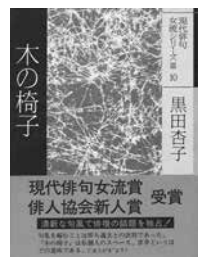
乾季の南インド行 二十九句(うち二句)

炎天や行者の杖は地をたたく

ボンベイの日暮は茄子のいろに似る

引きのこしおきたる母子草咲けり

花柘榴切火のごとし四十歳



『木の椅子』(牧羊社・昭和56年刊
 新装版 平成2年刊)
 昭和55年までの句を収める第一句
 集 序句・山口青邸 跋文・古
 館曹人 現代俳句女流賞・俳人
 協会新人賞受賞

『木の椅子』後記

卒業以来、およそ十年間* 俳句は見ることもすら
 避けてきた。自分のおもいを托すにはこの詩型はあ
 まりにも制約がありすぎ、かついささかの虚構も許
 さないのであった。

しかし、ある日突然、俳句をまた作ってみたいと
 いう衝動に駆られた。鮭が生れた川へ回帰するよ
 うに学生時代にご指導頂いた山口青邸先生へ迷う
 ことなく直行した。

まず、白塔句会に復帰、以後先生ご出席の会
 いくつかと自主的な勉強会のいくつかにも所属して
 現在に至っている。私は「夏草」に学ぶことを何よ

りも誇りに思っている。

今回、はじめての作品集を出すにあたってあら
 ためてふり返ってみると、私の俳句創作活動を根
 本的に支えてきたものは、山口青邸先生との存在と
 勉強句会・木曜会の連衆の存在であった。この二つ
 が両輪のように働いて、ともかくも私に停滞を許
 さなかった。しかし、個人に停滞のなかったことと
 作品の客観的価値は別である。

句集を編むことは即ち過去との訣別であった。
 句稿を決定した段階で、すでに私のころは100
 %、次なる地平をめざす歩みに移ってしまったこと
 を感じている。

勤めをもってから大勢のすぐれた専門家の方々
 を知った。とりわけこの数年間、私を常に励まし、
 新しい刺激を与えつづけて下さったのは作家・瀬戸
 内寂聴氏である。

人間として十全に生きるためには、如何に強靱
 な精神力が必要かということを身をもって示されつ
 づけている。

象潟 酒田
 きさがたのひるがほ紅をしぼりけり
 肉炙るなどかなしけれ昼の虫
 みちのくの菊のひかりにつまづくや
 夾竹桃天へ咲き継ぐ爆心地
 磨崖佛おほむらさきを放ちけり
 大夕立素顔のまゝにをんな老ゆ



昭和34年（1959）、21歳。東京女子大3年の夏休みに、学生セツルメントのメンバーとして九州の三井三池炭鉱に行き、第一組合の子供たちと勉強会を重ねました。



昭和47年（1972）頃、山口青郵先生80歳の頃。ご自宅の庭、雑草園にて。



38歳の頃、自宅和室にて。千葉県市川市に家建て、庭付き木造2階建ての暮らしが始まりました。

『木の椅子』は私個人のスペース、世界というほどの意味である。

青郵先生からは、このまぶしい序句（『木の椅子に君金の杳爽かに』編集部注）を賜り、古館曹人氏からは私の人生の指針書そのものの跋を頂いた。なんと私は果報者、なんとありがたいことであろう。このようなご恩に対し、未熟な私は、ただ今後も苦行・研鑽あるのみと覚悟を決めている。

昭和五十五年十二月三十一日 三度目のインドへ旅立つ日
 （*休俳期間は実際には六年弱 黒田杏子注）

新装版『木の椅子』後記

『木の椅子』の初版を手にして以来、十年の歳月が流れた。この一冊に向けて励んでいた時期、俳句に対する情熱は自分でも制御しきれないほどであったが、家族と俳句仲間以外に私が俳句を作っていることを知る人は皆無であった。長年机を並べているごく親しい同僚にも私はそのことを告げていなかった。つまり、私は誰にも話さなかったのだ。

いまから思うと、どうしてあれほど徹底出来たのか不思議な気がする。

一度口を開いてしまえば、俳句に向う私の祈りが濁ってしまう、俳句に対する絶対の献身が崩れてしまう、そんなおそれを抱いていたのだった。完全な黙秘を続けることよってのみ、俳句と自分との純粋な関係が保たれると信じ、自分だけにひたすら忠実に行動していた日々が懐かしい。

今は天界の人となられた青郵先生からは、愉しんで序句を案じていますというお便りののちに、何枚もの揮毫を賜った。生涯の宝である。

実家の父は出版費用全額の負担を申し出て譲らなかつた。その父もいまは那須野の土に還った。

寂聴師、古館曹人先生には変らぬご指導とお励ましを頂いて今日の私がある。

このたび、牧羊社川島壽美子社長のおすすめにより、「藍生」創刊の年に、第一句集が装いもあらたに再び世に出ることの幸運をかみしめている。

平成二年七月



昭和57年（1982）、43歳。第一句集『木の椅子』で現代俳句女流賞・俳人協会新人賞をダブル受賞。乾杯の音頭をとられる青郵先生。

『水の扉』

子をもたぬ四十のをんな地蔵盆
濤音に近づくわれも冬景色

人を焼くほのほがたたく冬の河
ひきがへる師の一語また師の一語
縄とびの子が戸隠山へひるがへる

百僧のたれかささやく常楽会

月山の明けゆくままに紅花摘女

秋の蝶ましろきものは西湖より

ふぐ鍋や壁に大きなジョン・レノン

かまくらへゆつくりいそぐ虚子忌かな



『水の扉』(牧羊社・昭和58年刊
装版 平成3年刊)
昭和55年から58年の句を収める第
二句集 序句・山口青邨

『水の扉』後記

第一句集『木の椅子』以降三年の作品をまとめた。インド・ネパールに行ったり、俳人協会訪中国に加えて頂いたりした。旅の時間の中で、かえって普段の私・日常の自分のこころに出合ったように思う。

ことが感動を上まわらないように季節や人物、風景、風土にじかに触れる体験を大切にしてきた。いつも自然体でいたいと希ってきた。

満九十一歳の山口青邨先生にふたたび序句をいただいた。(瀧かけて扉としたり山深く) 編集部注) 飯田龍太先生からのお励ましのことも忘れられない。

句集を編むことは作品を捨てることである。切

新装版『水の扉』後記

はるか昔のこのように思えるのだけれども、『水の扉』が出たのは昭和五十八年九月、わずか七年の歲月しか流れていない。

『水の扉』の準備中に、第一句集『木の椅子』の受賞を知らされた。おもいもかけないことであつた。

この七年間、私はかなり忙しく働いた。それはしかし、仕事を持ち、さらに俳句を作りつづける四十代の女にとってなかなか手ごたえのある、そして納得のゆく年月でもあった。

この期間の営みを、私はこれからじっくりと第三句集に集約していこうとしている。「藍生」という結社誕生の秋に、二つの句集が揃って新装版として再生することは、次なる私自身へのスプリングボードの提示とも思われ、天上から無限の励ましを賜わっているようなありがたさをも覚える。

平成二年九月



40代後半。黒田杏子を囲む勉強句会「木の椅子会」、超結社、超大学の会のスタート。青邨先生指導の、東大ホトギス会と東京女子大白塔会の学生、卒業生ほかの方々が集まりました。

り捨てる作業の中ではのかに次の世界が見え、勇気がすこしずつ湧いてくる。古館曹人氏をはじめとする木曜会は私の支えであった。牧羊社の川島壽美子氏にも大変お世話になった。

昭和五十八年六月

『いちぼくいつそう』
『一木一草』

秋つばめ包パオのひとつに赤ん坊
能面のくだけて月の港かな
落鮎おちあせの串抜きてなほ火の匂ひ
まつくらな那須野ヶ原の鉦叩
あたらしき夜寒の榭鳴りにけり
机拭く母に那須野ヶ原の月
いなづまや独逸語圏の塔の数
よく見ゆる眼大切野分あと
稲光一遍上人徒かちはだし跳は
指さして雪大文字ゆきだいもんじ茜さす
那須嵐男体なすあらし風ちちとはは
鳴りいづるあだしの鐘除夜篝

ガングスに身を沈めたる初日かな
狐火をみて命日を遊びけり
着ぶくれてよその子どもにぶつかりぬ
昭和六十三年十二月十五日 山口青郵先生長逝
寒牡丹大往生のあしたかな
火の中を焰のすすむ十二月
寂庵に雛の間あり泊りけり
引鶴や茶毘の火の粉の無尽蔵
法螺貝のあるときむせぶ修二會かな
達陀だつたんや火中の椿掃かれつゝ
蛇穴を出て神木の枝の先
父を焼き師を焼き蓬餅あをし
たそがれてあふれてしだれざくらかな
空をゆく花びら五十寂しきか
花に問へ奥千本の花に問へ



『一木一草』(花神社・平成7年刊)
昭和58年から平成5年までの
句を収める第三句集 俳人協
会賞受賞

『一木一草』後記

『一木一草』(いちぼくいつそう)は『木の椅子』『水の扉』(共に牧羊社)につづく第三句集で、一九八三年(昭和五十八年)晩夏から一九九三年(平成五年)初秋までに各誌紙に発表、活字となった九十年間の作品からの五百句である。章立ては前半の五年を巻、後半の五年を式として季ごとに分けてある。

第二句集『水の扉』準備中、第一句集『木の椅子』に現代俳句女流賞、俳人協会新人賞が授与され、にわかに身辺が忙しくなったとき、ひそかに私は決意した。この次の句集の制作期間には最低十年をかけよう。可能なかぎりの実作修行をつみ重ねた上で、十年のちにあらためて全作品を俯瞰し、その時点の自分の力で選句、納得のゆく句集

を編む。十年の途上で決して作品を整理したりまとめたりしない。ひたすら作りつづけるのみと。

満十年が経過したとき、育ってきた風土を同じくする大久保憲一氏の花神社から、希っていた通りの一巻を信頼する福田敏幸氏の手でまとめ、出版して頂くことができた。深く感謝している。

この十年、私個人の決意とは別に、各方面から句集出版のお誘いを頂戴した。最終的に自分自身が納得できないかぎり、行動できない性格から、せっかくのご好意を無にしたり、ご迷惑をおかけすることの多かったことをあらためてここにお詫び申上げる。

十年の俳句修行では、青郵先生のご指導に加えて、古館曹人氏を盟主とする「夏草」の連衆句会「木曜会」にはかり知れない恩恵を享けた。初期の長谷川權・岸本尚毅両氏との三人吟行句会や、現在も続いている勉強句会「木の椅子」の若い作者たちとの交流、さらに藤田湘子先生の呼びかけでスタートした鈴木真砂女先生の「卯波」での月曜会というまたとない勉強の場も大きな支えであっ

人の子に名を授けたる月見草
一の橋二の橋ほたるふぶきけり
この雨に母も落煮てをるならむ
鶴篝の波や五十の夢のあと



50歳くらい。山梨の日本最高齢の山高神代櫻を訪ねて。30歳から単独行「日本列島櫻花巡礼行」をスタート。45歳からは大塚未子デザインのもんペルックに全面切りかえ。これは手紡ぎ手織藍木綿のもんぺ。

た。句会こそ作句の源泉であった。
寂庵嵯峨野僧伽での月例あんず句会もこの秋九周年を迎える。関西とのゆたかな出会いの場を与えて下さった瀬戸内寂聴先生にも感謝を捧げたい。
二千五百ほどの発表作を五百句にしぼりこもうと決めると、作句の瞬間、手ごたえを感じた句だけが残った。句を捨ててゆく過程で知った爽快感と愉悦感に驚いている。惜しみなく作句に打ちこむ歳月を重ね得たからこそ惜しみなく捨てる事が出来たのだ。この充実感を次の句集への火種としたい。

最後に、「藍生」の題字も頂いた榊莫山先生にこのたびも見事な題字その他を賜ったこと、アートデザインレクシオンを畏友かつ同僚でもある中原道夫氏に担当して頂いたことを至福のことと感謝し、深くお礼申上げる。

山口青郵先生七回忌 いそ子夫人一周忌に参じたみちのく盛岡にて 一九九四年十一月五日記す



雪の日、東京・柳橋にて。40代から徹底した独り吟行をスタート。ともかく「吟行」を重ね「多作多捨」を貫くことに。



寂聴さんと。昭和60年(1985)の秋から寂庵で始まったあんず句会は28年間毎月欠かさず続きました。



平成元年(1989)、古館曹人さん(左)、長谷川權さん(右)と。『俳句の宇宙』で俳人協会評論賞奨励賞を受賞された權さんに花束を渡す役をつとめました。

『花下草上』

この冬の名残の葱をきざみけり
ととのへてありし一間の雛づくし
グレゴリア讃歌ほうたる来つつあり
イタリヤ アレッツォにて



『花下草上』(角川書店・平成17年刊)
平成6年から17年までの句を収める第四句集

『花下草上』後記

一九九五年(平成七年)一月刊行の『一木一草』

あたたかにいつかひとりととなるふたり
 ひとはみなひととわすれゆくさくらかな
 西蔵チベットの端午の星をおもふべし
 上海や金魚冥きにひるがへり

常寂光寺より望拝

はるかなる火の音はるか大文字

阿部なを先生 二句（うち一句）

ねふた来る闇の記憶の無盡蔵

飛ぶやうに秋の遍路のきたりけり

観音堂に泊めていただく

よもすがら花ふぶきけり園城寺

身の奥の鈴鳴りいづるさくらかな

石割つて花の木となる箒星

十葉を刈り干し一家族いちにん二人

「四國八十八ヶ所遍路吟行」スタート 五句（うち二句）

やうやくにをんな遍路をこころざす

花ひらくべし暁闇の鈴の音に
 花巡るひとよ一生のわれをなつかしみ
 十葉を挿して嫌ひなことはせぬ

金木

雨の津軽の中庭の沙羅の花

瀧落ちてゆく人老いてゆく時間

流星の果てなる鸚鵡小町かな

この世にて稲妻に馴れ旅に馴れ

岩屋寺に月ほそりゆく芒種かな

みちのくの雲に触れゆく解夏の僧

深秋の蝶寂庵の勝手口

いつせいに残花といへどふぶきけり

みなづきの何も描かぬ銀屏風

雲水の雨雲いろの麻衣

足摺岬 金剛福寺 三句（うち一句）

雨林曼荼羅螢火無盡蔵

に続く第四句集です。『一木一草』には五百句を四季別に収めました。今回は、八百句を自選し、作品発表年度ごとに収録しています。五十六歳から六十六歳に至るこの十年余り、私は惜しみなく季語の現場に立ち、句作に打ち込む時間を優先して暮らすことを許されました。年ごとに出会いに恵まれ、句縁、地縁を深めつつ、またとない日々を重ねて今日に至っております。まことにありがたい歲月でした。

長い間、ひとりで櫻を訪ねておりましたが、ある日、篠田桃紅先生の随筆の中で、「花下草上」という四文字に出合った瞬間、句集名が決まりました。桃紅先生の著作を何冊も手がけてこられた菊地信義さんが装幀をお引受け下さいましたが、菊地さんの選ばれた篠田作品をたまたま私が所蔵しておりました。使用許可を賜りました篠田先生に感謝申し上げます。

『一木一草』は青郵先生ご夫妻に捧げさせて頂きました。このたびの『花下草上』は、「藍生」

創刊の前年に八十八歳で帰天の父と、三年前に九十五歳の天寿を全ういたしました母に捧げます。母の導きで句作をはじめました私は、いまなお母の励ましと禱りに守られ、父の慈愛に包まれております。

前世紀の終り、私の五十代の終りの時期に全力を挙げ、聞き手をつとめさせて頂きました『証言・昭和の俳句』ご登場の十三名の大先輩の作家との出会いと交流はいまも、無限の勇氣と気合を私に注いでくださっています。一期一会のこの仕事をすすめる過程で、次の句集には少なくとも十年という時空を私自身の作品制作にあてる。結果を冷静沈着に自分自身が眺める。その上で自分をごまかさなない一冊にまとめるべきだという示唆を授けられたのでした。

この十年を振り返ってみますと、結社のプログラムとして実行して参りました西國三十三観音札所を年四回で巡拝する「西國吟行」が八年六ヶ月で満行。引きつづき、四國八十八ヶ所を巡礼する

八重山石垣行 三句（うち一句）
 日没ののちの八重山上布かな
 いちじくを割るむらさきの母を割る
 月山の薬草乾く月夜かな
 みな過ぎて鈴の奥より花のこゑ

四万十川 三句（うち一句）

漕ぎいづる螢散華のただ中に
 猫は飼はず金魚も飼はずわれを飼ふ
 大文字火の音天にのこりけり
 枯れてゆくひかり枯れきつてゆくちから
 濡るるともなき花冷の山河かな
 花三分睡りていのち継ぐ母に
 不知火や石牟礼道子明滅す
 雛の間月山の闇流れけり
 遊行者一遍倒れ伏す曼珠沙華
 月の寺百鬼夜行図など蔵す

母 齊藤節 満齢九十五

なつかしき広き額の冷えゆける
 山櫻訣るるはまた逢はむため
 狐火のみづみづしきは父母の山
 高野山常楽会に参す 九句（うち一句）
 涅槃図をあふるる月のひかりかな
 花に逢ふ眼のふたつありて老ゆ
 一介の老女一塊の山櫻
 真清水の音のあはれを汲みて去る



13人の戦後俳人のインタビュー集『証言・昭和の俳句』の聞き手としての顔。平成11年(1999)から12年にかけて、角川書店「俳句」に18ヶ月間連載。のち角川選書に。

「四國遍路吟行」と坂東三十三観音札所を巡拝する「坂東吟行」がスタート、つつがなく現在進行中です。「四國遍路吟行」は本年(平成十七年)十二月に満行、来年は高野山行となります。日本列島各地に遺された壮大な歴史の道、禱りの道を、連衆と共に、急がず、弛まず、愉しみつつじっくりと巡り、辿りながら、それぞれに自己発見を重ねてゆくという学習プランを発想できましたのも、二十一年前から寂聴先生のご提案によりスタートしました寂庵嵯峨野僧伽での「あなず句会」という月例句座のお蔭なのです。関東に生まれ育った私にとって、四十代の半ばから現在まで、月一度欠かさず京都に出かけてゆく暮らしが人生に定着したことの恵みの深さははかり知れません。

さらに、この期間には、三十歳から始めました単独行「日本列島櫻花巡礼」が五十七歳で満行を見、第二次の行として「日本列島残花巡礼」もスタート、愉しみとして進めております。京都の櫻守佐野藤右衛門さん、土佐山中の中越律翁^{ただし}をはじめ、櫻を巡り訪ねる旅の途上で遭遇できた列島各地のすばらしい方々の数もご恩も無限です。

山口青郵先生の長逝により、「夏草」は終刊となりました。『二木一草』は古館曹人さんを中心とする勉強句会「木曜会」の深見けん二、斎藤夏風さんほか「夏草」同門の兄弟子と連衆に支えられた句集でした。

このたびの『花下草上』は、あらたに藤田湘子、三橋敏雄、上田五千石、鈴木真砂女、飯島晴子、後藤綾子などの大先達をはじめ、中原道夫、星野椿、鈴木榮子、小澤實、大串章、星野高士、中村和弘、小島健、小檜山繁子、坊城俊樹、池田澄子、鳴戸奈葉さんほかさまざまの方々と学ぶことのできた「月曜会」にも支えられました。さらにまた、今井杏太郎、阿部完市、榎本好宏、仁平勝、細谷暁々、横澤放川、橋本榮治、西村和子、權未知子、山下知津子さんらと自在に句座を重ねております「MOCCOOの会」という勉強の場にも大きく支えられております。ちなみに「MOCCOOの会」のメ

ンバーによる同人誌が「伴」であり、この会が「みづき賞」を制定しております。

数え上げればきりがありませんが、とりわけ只見川流域の奥会津九ヶ町村との長い長い交流や、故荒木忠男大使の導きでスタートした「イタリア俳句友の会」との友情に満ちた交流、さらに「東京やなぎ句会」という人生の達人グループの異色の句座にも折々に加えて頂きますことなどが私の大きな幸福の源泉です。

お蔭さまで「藍生」はこの秋、創刊十五周年を迎えます。創刊以来、「同人制なし・全員均一会費・基金募集なし」の方針を貫いて、この俳句列島日本の津々浦々に自主参加の句友が存在、「藍生」に抛りつつ、個性ゆたかな俳句人生を自在に存分に送っておられる事実を嬉しく思います。全会員の合力によって、東京の神保町に、結社の情報・作業センターとしての、藍生事務所を賃貸で設け、有志によるボランティアで自主運営が進められております。



『黒田杏子 句集成』（角川書店・平成19年刊）
『木の椅子』『水の扉』『木一草』
『花下草上』『別巻 季語索引・初句索引』全5冊

『黒田杏子 句集成』後記

山口青郵先生に再入門を許されてから四十年になります。その間に四冊の句集をまとめました。第二句集の『水の扉』を除きますと、どの句集にも十年余りの制作期間をあててきました。

作った句・活字になった句の中から、句集に収録する作品はいずれの場合も限られた句数となってしまふのが常でした。

句集に収めたいと思う作品は、自分のところのかたち、想いの深くしみこんでいるものという自選基準に従ってきました。目立たないもの、地味なもの、平凡なものが多くなるのです。

四冊の句集を編むことが出来たお蔭で、私はほ

さて、ここに収録いたしました八百句は、原則として既発表句（活字になったもの）からの自選です。櫻・遍路・螢・月の句が目立ちますが、同じモチーフ（季語）が年輪を重ねて、すこしずつわが身に添ってくる感じを確認できましたのも、十年という制作期間を経て現在只今の私の選句基準に従ったことの恵みかと思われれます。句集を編む作業は、修行途上の私のありのままの姿をじっくり眺める機会となり、次への歩みをうながしてくれました。現在の自分以上でも以下でもないこの素朴な一冊が私を照射してくれております。

最後に、在職時から私の愚直な歩みに眼をとめられ、句集刊行に至る今日まで、関心とお励ましを寄せつづけて下さった角川文化振興財団の中西千明さんに心からの感謝を捧げます。

平成十七年八月

んとうの自分に出合いました。これが自分という人間らしいということを知り、落着いて自分を眺めることが出来たことをありがたいことだと思っております。

次の句集、五冊目の句集も遠からずまとめたいと考えています。この句集はこれまでのように十年余りの制作期間を置かず、五年ほどの作品を収めるつもりです。この句集には七十歳、古稀を超えてゆく時期の私の自然観と人生観が過不足なく反映されている筈です。ともかく、鈍重な歩みを続行してきている自分が、次の句集に向けて積極的な作句姿勢を維持出来ることよろこびを覚えます。

大学を卒業と同時に無縁となってしまう俳句。その俳句を唯一の表現手段として、三十歳を目前にして再開出来たこと。現在は文字どおり、この俳句を人生の杖として生きていること。句縁により数多くのすばらしい方々に出会い、さまざまなお励ましと教えに恵まれて、こころ豊かな日々を重ね

ていること。句友という得がたい友人たちの友情とまごころに包まれ、支えられて、毎日を充実のうちに迎え送っていること。なんとありがたいことかと感謝しています。

これまでの四冊の句集に収めた自分の作品とじっくりと対面してみたい。いまこそその作業が必要なのではないか、という想いからかれて、そのためにはどうすべきか、ということをも菊地信義さんにご相談してみようと考え、ご連絡をとらせて頂きました。

菊地さんには第四句集『花下草上』のまとめ方と句集の制作をご担当頂き、希っていた以上の作品集を作って頂いております。

このたびもすべて菊地さんの設計・デザインにより完成。これ以上のよろこびはありません。各句集に附されていた序句、跋文、あとがき、解説などをすべて外し、俳句作品だけを読むことの出来るものとする(データはまとめて記載)。このような作品集を設計、制作して頂けるとは当初考えてお

かしたいと希っています。

最後に、この『句集成』制作作業全般にわたって、句友の野木藤子さんの強力な援助を頂き、さらに、句友の二宮操一さんのお力添えも頂きまし

『日光月光』

夜空濃くなる立佞武多高くなる

往還と呼ぶ炎ゆる道終戦日

枯れて立つ枯れ切つて立つほこらかに

兄ひとり発ちたるふゆのはなわらび

永 六輔さんと

ラジオこども電話相談初仕事

雛飾る北國街道玉霞

りませんでした。菊地さんのプランを伺って、私にあらたな意欲が湧いてきました。第五句集に対する積極性も高まりました。ありがたいことです。

別巻を含めて既刊四句集と合わせて五冊。そのすべてを収める容れ物は、「黒田さんなら布だね。風呂敷とか袋とか。」というご提案に嬉しくなりました。夢がふくらんでゆきました。

京都東山知恩院前の「一澤帆布」とは先代の一澤信夫翁の時代からのおつき合い。その後継者一澤信三郎・恵美夫妻とも長いおつき合いで、深い友情に結ばれてきました。現在、新生「一澤信三郎帆布」となつていよいよ顧客の信頼を受けているこの店にたのんで、特製の布靴を制作して頂くことも出来ました。さらに嬉しいこと。この布靴には菊地さんが「藍生」のシンボルマークを特別にデザインして下さったオリジナル作品がシルク印刷されていることです。菊地信義さんという装幀家がこのたびの私の作品集にあらたないのちを吹きこんで下さったのです。そのいのちの炎を私は次の句集に生

た。角川文化振興財団の中西千明さんほかの方々のいていねいなお仕事にも支えられました。皆さまに厚くお礼を申し上げます。

平成十九年 仲秋



『日光月光』(角川学芸出版・平成22年刊)
平成17年から22年の句を収める第五句集 蛇笏賞受賞

『日光月光』後記

この秋、「藍生」創刊二十周年。

嵯峨野僧伽での瀬戸内寂聴先生命名による

「あんず句会」も二十五周年。四十代の半ばから、毎月一度、京都に通う歳月が私の人生にもたらしてくれた恵みははかり知れませんが、感謝しております。

亀鳴くと母も一句を遺しけり

佐渡

島びとの寂かに祀る御所櫻

暁の虫なかんづく鉦叩

一遍のこゑ空海のこゑ野分

アビゲール不二と墨書の寒見舞

満ちて月高野のさくら山櫻

花満ちてゆく鈴の音の湧くやうに

日光月光すずしさの杖いつぼん

山姥と夏蚕のかほと相似たり

曝書して官製はがき石垣りん

七月三十一日 通夜 用賀会館

夏終る柩に睡る大男

九月六日 白塔会

がうがうと野分宮さまご着席

永き世をふたり長き夜なるふたり

返り咲く草木いろいろ青郵忌

あゆみつづける狐火を眼の底に

枯るる高野のあかときを星座揺れ

立春のはがき小三治師匠より

みつまたの苔にあたる雪の音

一遍忌一遍像を拝しけり

妹の仕立ててくれし菊枕

お年玉はがき三笠宮よりの

鉏路まで島梟に逢ひにゆく

佐佐木幸綱最終講義春雷す

読みづらきはがきなれどもあたたかし

漂ふと見れば漂ふ落花また

落花一片谷わたりきてわれを過ぐ

どの谷のいづれの花となく舞へる

なほしばしこの世をめぐる花行脚

また、この國の全都道府県に句友が存在し、その投句作品に接する時間の集積を通してかけがえない友情と信頼の絆が培われてきております事実に感謝を捧げます。

第三句集『二木一草』は山口青郵先生・いそ子夫人に。第四句集『花下草上』は父母、齋藤光と節に捧げました。そのうち第一句集『木の椅子』から第四句集までを収めた『黒田杏子句集成』も刊行させていただいております。

このたびの第五句集『日光月光』は二十周年を迎える「藍生」のすべての仲間にはげたいと思います。

大学入学と同時に、俳句研究会「白塔会」に入会、山口青郵先生のご指導を受ける幸運に恵まれました。しかし、卒業を機に私は自らの意志で句作と無縁になり、さまざまな表現形式を試みた末、二十代の後半によく句作の道に立ち戻り、青郵先生に再入門をお許しいただいた者です。

去る十月十五日（金）のことでした。「あんず句会」の晩、京都のホテルの自室に夕刊が届いておりました。

朝日新聞文化面、「私の収穫」と題するコラム。フランス文学者の海老坂武氏の文章が眼に飛び込んできました。冒頭からの十六行を引用させていただきます。

私は自分の世代を〈チボー家世代〉と勝手に呼んでいる。反戦行動のために命を落としたジャックの物語、『チボー家の人々』（マルタン・デュ・ガール）は高校生の頃、大げさに言うなら周囲の友人が皆読んでいた。高校に入った年に朝鮮戦争が始まった。二十歳に近い頃に水爆実験があり、都下の砂川では米軍基地の拡張が進行した。ついで安保改定・ヴェトナム戦争と続いている。その中で青春を送った同世代の少なくとも一部には、反戦の汗と涙がしみ付いていると信じる。――後略

さらさらと更ふる衣のジャワ更紗
母とならねど母ありし母の日や
囀鮎など眼の端に靴を脱ぐ
ほたる待つ還らぬひとを待つやうに
ほたる火や兄の遺せしインク壺

観音堂平和祈願

三井寺の鐘が鳴ります原爆忌

淡海 五句（うち一句）

七十をひとつ越したる良夜かな

大寒の野ねずみ樹上大がらす

森巖清澄秩父寒満月暁闇

露のたう母が揚げますたすきがけ

四月十五日 高野山 二句（うち一句）

いつかふたりいづれひとりで見える櫻

一人の死して六月十五日

老女たのし辣蕪漬けず梅漬けず

玉蟲を巡礼の野に還しけり
盆の月樺美智子の母のこと
十六夜の雲割つて飛ぶ一遍忌



平成20年（2008）、70歳古稀のお祝いの花束を故三笠宮崇仁殿下より手渡される。三笠宮崇仁殿下は89歳から95歳まで白塔句会にご出席、黒田杏子の選をお受けになられました。俳号は三笠宮若杉。東京女子大学で長らく「古代オリエント史」を講じられました。

新聞を手にしたまま私は涙ぐんでいました。栃木県北部の喜連川という小さな城下町。出生地は東京ですが、その町で私は中学時代を過ごしました。父は開業医。母と三つ上の兄が熱中して読み継いでいた『チボー家の人々』を私も負けじと読み始め、たちまち引き込まれてゆきます。白水社気付で訳者の山内義雄という方に手紙で問い合わせます、「マルタン・デュ・ガールさんはフランスの方ですが、英語がお読みになれますか。中学生の私は英語の手紙しか書けません。英文でいいのなら感想文をお送りしたいのですが、ご住所をお教え下さい」。

まもなく山内義雄さんから小包が届きました。麻紐をかけた茶色の厚手の紙に包まれた中味は書物。ジイドの『狭き門』『背徳者』『ロベール』『贖金つくり』『女の学校』などの新潮文庫が何冊もきつちりと和紙にくるまれて出てきたのです。便せんに、「マルタン・デュ・ガールさんへのお手紙

は英語で大丈夫。あなたの感想文はよろこばれるでしょう。ぜひお出し下さい。本は大人になったら読んでください。住所は次の通り」と認められ、名刺も添えられておりました。昼の間にほどかれた小包の前に、母は感激して涙を拭いておりました。

その晩、私は手紙を書いたのです。そして、次の日曜日の朝、ひとりで二時間ほどバスに揺られて県庁所在地である宇都宮までゆき、本局の郵便局からエメールを投函しました。情けないことに、現在の私は英文で手紙を書くことなど全く出来ないのですが、中学三年生の私は、当時流行していたペンパルという文通制度に熱を上げていたこともあり、まず日本語で手紙を書いて、それをなんとか英訳してはアメリカの友人などと文通していたのです。高校生になった夏休み、何とデュ・ガールさんから船便の絵はがきが届きました。西瓜を割って家族揃って縁側で食べていたときです。フランス語で「日本の小さなお友達へ」と書かれてい

ますと、荒井賢次郎先生が訳して下さったその葉書の表はモノクロームのフォンテンブローの森の写真でした。その年の暮にはクリスマスカードもやはり船便で届きました。

二通のお便りは、上京して大学生となり、医学部の兄と栄養学専攻の妹と一緒に棲んでいた高円寺のアパートの本棚に収められた『チボー家の人々』の二巻と三巻にはさまれて、私たちを訪ねてくるあらゆる友人が眼にしました。

安保のデモにあげられていた日々、アパートには連日連夜大勢の仲間が押しかけ、さながら梁山泊でした。樺さんが亡くなられ、学生たちの熱気は潮のように引いてゆき、気がつくとき、デュ・ガールさんの二通のお便りのはさまれた『チボー家の人々』もその二冊だけが本棚から消えていました。

残念なことですが、今も誰かが必ず持っている筈です。ちなみに、デュ・ガールさんへの私の手紙の書き出しは「Dear Jack……」と記憶しています。片田舎の女子中学生であった私は、反戦活動

に全力を投じてゆくジャックという主人公の青年に共感と連帯のこころを告げたのだと思います。

歳月は流れ、父は八十八歳、俳人であった母は九十五歳の大往生を遂げ、兄は七十歳でこの世を立ちました。

兄の歳を越え、私はいま「藍生」の仲間と秩父三十四観音を巡拝する吟行会を重ねております。嵯峨野寂庵を起点に、五十代で西國三十三観音、六十代で四國八十八ヶ所の札所を巡りつつ、合わせて坂東三十三観音の巡拝吟行も満行いたしました。来年の秋には、日本百観音巡拝も結願となる見通しです。

そのとき、私は天上の山内義雄先生とロジェ・マルタン・デュ・ガール氏にご報告のお手紙を認めたいと思っています。

この世ではお目にかかることのなかった先達お二人の無限の慈しみに護られて成人し、私は現在に至るまであまたの方々との佳き出会いに恵まれて

古稀を越えることが出来ました。

世界最短の表現形式である俳句を杖に、現在私は、日本の一人の市民として平凡ながら手応えのある日々を送らせていただいております。そのことをぜひ天上のお二人にお伝え申し上げ、感謝を捧げたいと希っております。

最後にこのたびの句集も菊地信義さんが設計してくださいました。作品の編集その他には野木藤子さんのご尽力をいただきました。おふたりに深く感謝申し上げますとともに、角川学芸出版の俵谷晋三部長、鈴木忍さんのご協力にお礼申し上げます。

二〇一〇年十月二十日



平成23年(2011)、73歳。『日光月光』蛇笏賞授賞、その晩の祝賀会で。左から星野椿さん、佐佐木幸綱さん、金子兜太さん、黒田杏子、装幀家の菊池信義さん。撮影＝黒田勝雄

『銀河山河』

あさがほの縹はなだ一輪ふたり棲む

七十の坂迂回せよ稲びかり

平成二十二年十月二十八日 わが師古館曹人大兄長逝。
十一月六日朝に知る、葬儀・告別式などすべて不要とされ、晩年は居所も明かされなかった。九十歳
八句を捧ぐ(うち二句)

時雨聴くやうにまなぶた閉ぢられしか

朴の葉の炎で仕舞ふ落葉焚

眼の奥に棲む狐火も年を経たり

毛糸編まず煙草喫はず句座に老ゆ

賀状書く若杉先生一枚目

本当は自分が怖い雪をんな

かなしめば小径泉に到るべし

泉湧くとほき慈愛の音たてて

明易の星筆写して蛇笏の句

九月十九日・二十六日放送「BS俳句王国」にて発表
亡き父母

長命無欲無名往生白銀河

六波羅や念佛あをき雪ぼたる

父の投ぜし朴落葉火の最期

消印は三月十日花を待つと

法然繪巻一遍繪巻花盡きぬ

みちのくの花待つ銀河山河かな

平成二十四年四月八日 結社「藍生」の「日本百観音巡
拝吟行」秩父にて結願 十四句(うち二句)

春の月満ちて遊行者漂泊者

西國四國坂東秩父櫻

六月二十三日 那珂川畔に句碑除幕
鮎のぼる川父の川母の川

炎天や伽藍をめぐる蝶の数



『銀河山河』(KADOKAWA・平成25年)
平成22年から25年の句を収める第六句集

『銀河山河』後記

このたびの第六句集『銀河山河』には、平成二十二年から二十五年の作品六百句を収めました。

岩井久美恵、榊莫山、河野裕子、古館曹人、佐々木由幾、辺見じゅん、眞鍋呉夫、長尾憲彰、小沢昭一、浜崎浜子、谷川健一。この間、心から敬愛する方々が天上に帰られました。

平成二十三年三月十一日。みちのくに句友が大勢おりました。さらに、福島県文学賞俳句部門(二人50句応募)の選者もお引き受けしていました。ここでは地震津波に加えて原発事故の被災者の

方々とその作品にじかに接し、選に当る重責を負うこととなり、人生観、自然観、そして俳句観の変革革新を迫られつつ現在に至っています。

三十歳から重ねてきました単独行「日本列島櫻花巡礼・残花巡礼」が満尾。さらに結社のプログラム「西國四國坂東秩父」の日本百観音巡礼と八十八ヶ所の遍路吟行も二十年をかけて、昨春結願満行となりました。

また、昭和六十年に寂庵嵯峨野僧伽でスタートしました瀬戸内寂聴先生命名による「あんず句会」も、本年三月を以て終了しています。

『日光月光』で蛇笏賞を頂きました。蛇笏全句の筆写を発心、時間をかけて完了。実に多くのことを学ぶことが出来ました。

そして、炎熱の今年八月十日。私の七十五歳の誕生日。ご縁を得て、長い年月、松山に行けば空港より直行して拝しておりました誕生寺寶嚴寺のあの美しい二遍立像が本堂庫裡もろともに炎上、灰燼に帰りました。

ひとにふるさとふるさとしぐれ雲
ひとり聴くなら極月の鉦叩
朱鷺の往き白鳥の来る初御空
心経一卷奉る瀧櫻

灰燼に帰したる安堵一遍忌
存へしこと櫻の句詠みしこと

明易の互ひに覚めてゐたりけり
NOと応へむ昼寝より覚めたれば

平成二十五年七月三十一日 鶴見和子を語る「山百合忌」
山の上ホテル

美智子皇后石牟礼道子晩夏



平成25年(2013)、74歳。あんず句会最終回。90歳を機に寂聴さんはライフスタイルを一新されると宣言。「ここで学んだことのすべてを各人が発展させよ」と檄を飛ばされました。

はじめて御像を拝した若き日、
稲光一遍上人徒跣

の一句を授かり、以来、九月二十三日の一遍忌には
毎年必ず句を捧げてきました。

『日光月光』の末尾の句も、

十六夜の雲割つて飛ぶ一遍忌

でした。奇しくも今年は七百二十五回忌。忌日を
前に御像は忽然と旅立たれたのです。

この國の「百観音」と「四國八十八ヶ所」を巡
拜、櫻の木々を巡って、大きな励ましを賜ってき

ました。國宝の一遍繪巻の跡も辿ってきました。
発心のすべてが満行・結願に至りましたいま、あ

らためて、遊行上人一遍の言葉「捨ててこそ」が
この身と心に沁みわたります。出合いのすべてを

ありがたい啓示と享けとめ、いよいよ謙虚に簡素
にかつ旺盛に句作の道を進んでゆきたい。いまその
ことを強く希っています。

このたびも句稿の集約、編集、構成に当って
は、野木藤子さんとディスカッションを重ね、ご協

力を得ました。

装幀・ブックデザインは『日光月光』に引き続
き、すべて菊地信義さんの設計に従っております。

ありがたいことです。

制作・刊行につきましては、角川学芸出版の鈴
木忍さん、石井隆司さん、滝口百合さんにお世話
になりました。

皆さまに心よりの感謝を捧げます。

二〇一三年九月二十三日 一遍忌

〈感謝をこめて——本誌掲載にあたって〉

思いもかけないことでした。「俳句αあるふあ」でこのような特集を組んでくださいましたこと、
ありがとうございますよりお礼申し上げます。

八十歳という年に、これまでの自分の歩みをじっくりとふり返り、こののちのあり方を考える
機会を与えて頂きましたこと、望外のよろこびです。

つぎの句集は『花に問へ』です。一遍上人の法話を頂きまして第七句集を構想、現在作業にと
りかかろうとしております。

二〇一九年五月二十日

黒田杏子